

## 0.1 H28 数学 A

[1] (1)  $|x| \leq \frac{1}{2}$  なら  $5 - 1/(1+x)^2 > 0$  である. よって  $0 < \int_0^x 5 - 1/(1+t)^2 dt = 5x + 1/(1+x) - 1$  である. よって  $0 < \int_0^x 5t + 1/(1+t) - 1 dt = 5x^2/2 + \log(1+x) - x$  である. よって  $-5x^2/2 < \log(1+x) - x$  である. また  $5 + 1/(1+x)^2 > 0$  である. よって  $0 < \int_0^x 5 + 1/(1+t)^2 dt = 5x - 1/(1+x) + 1$  である. よって  $0 < \int_0^x 5t - 1/(1+t) + 1 dt = 5x^2/2 - \log(1+x) + x$  である. よって  $5x^2/2 > \log(1+x) - x$  である. すなわち  $|\log(1+x) - x| < 5x^2/2$  である.

(2)  $\sum a_k$  が収束するから, ある  $N \in \mathbb{N}$  が存在して,  $n \geq N$  ならば,  $a_n < 1/2$  である. 無限積の収束性は  $k = N$  からの無限積の収束性と同じ. また (1) より  $|\log(1+x)| \leq Cx^2 + x$  である.  $\log$  の連続性から

$$\log \lim_{n \rightarrow \infty} \prod_{k=N}^n (1+a_k) = \lim_{n \rightarrow \infty} \log \prod_{k=N}^n (1+a_k) = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=N}^n \log(1+a_k)$$

である.

絶対級数  $\sum |\log(1+a_k)|$  の収束性を考える.

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=N}^n |\log(1+a_k)| \leq \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=N}^n Ca_k^2 + a_k = C \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=N}^n a_k^2 + \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=N}^n a_k$$

右辺は収束するから,  $\sum \log(1+a_k)$  は絶対収束する. よって収束するので,  $\lim_{n \rightarrow \infty} \prod_{k=N}^n (1+a_k)$  は収束する.

(3)  $\sum_{k=1}^{\infty} \frac{(-1)^k}{3k+1}$  と  $\sum_{k=1}^{\infty} \left( \frac{(-1)^k}{3k+1} \right)^2$  の収束を示せばよい.  $S_n = \sum_{k=1}^n \frac{(-1)^k}{3k+1}$  とする.  $S_{2n} = \sum_{k=1}^n \left( \frac{1}{3(2k-1)+1} - \frac{1}{3(2k)+1} \right)$  であり,  $\frac{1}{3(2k-1)+1} - \frac{1}{3(2k)+1} > 0$  より  $S_{2n}$  は単調増加する. 同様に  $S_{2n+1} = 1/4 - \sum_{k=1}^n \left( \frac{1}{3(2k)+1} - \frac{1}{3(2k+1)+1} \right)$  であり,  $\frac{1}{3(2k)+1} - \frac{1}{3(2k+1)+1} > 0$  より  $S_{2n+1}$  は単調減少する.  $S_{2n+1} - S_{2n} = 1/(3(2n+1)+1)$  であり,  $\lim_{n \rightarrow \infty} S_{2n+1} - S_{2n} = 0$  である. また  $S_{2n+1} = 1/(3(2n+1)+1) + S_n > 0$  より  $S_{2n+1}$  は有界な単調数列であるから収束する. したがって  $S_{2n}$  も収束して  $\lim_{n \rightarrow \infty} S_{2n} = \lim_{n \rightarrow \infty} S_{2n+1}$  である. よって  $\sum_{k=1}^{\infty} \frac{(-1)^k}{3k+1}$  は収束する.

$\sum_{k=1}^{\infty} \left( \frac{(-1)^k}{3k+1} \right)^2 = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{(3k+1)^2} < \frac{1}{9} \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^2} < \infty$  である. とともに収束するから無限積も収束する.

[2] (1)  $y \in f_A(W^\perp)$  を任意にとる. ある  $x \in W^\perp$  が存在して  $y = f_A(x)$  である. 任意の  $u \in W$  について  $(u, y) = {}^t u A x = {}^t (A u) x = ({}^t A u, x) = (f_A(u), x) = 0$  である. よって  $y \in W^\perp$  である.

$A$  の固有値  $\lambda \in \mathbb{C}$  と固有ベクトル  $v \in \mathbb{C}^n \setminus \{0\}$  をとる.  $x, y \in \mathbb{C}^n$  について標準エルミート内積  $(x, y) = {}^t x \bar{y}$  を定める.  $\lambda(v, v) = (Av, v) = (v, {}^t \bar{A} v) = (v, \bar{\lambda} v) = \bar{\lambda}(v, v)$  である.  $(v, v) > 0$  より  $\lambda = \bar{\lambda}$  である. よって  $\lambda \in \mathbb{R}$  である.

(2)  $A$  の固有空間全ての直和を  $W$  とする.  $\mathbb{R}^n = W \oplus W^\perp$  である.  $f_A(W) \subset W$  となるから,  $f_A|_{W^\perp}: W^\perp \rightarrow W^\perp$  を得る.  $\mathbb{C}$  による定数倍を加えることで  $\mathbb{R}^n$  を  $\mathbb{C}$  上線形空間  $\mathbb{C}^n$  に拡張する.  $W, W^\perp$  も同様に  $\overline{W}, \overline{W^\perp}$  に拡張する.  $f_A|_{W^\perp}$  は  $\overline{W^\perp}$  上の線形変換に拡張できる.  $W^\perp \neq \{0\}$  なら  $f_A|_{\overline{W^\perp}}$  の固有値  $\lambda$  と固有ベクトル  $v \neq 0$  をとれる.  $u = 0 + v \in \overline{W} \oplus \overline{W^\perp}$  とする.  $Au = \lambda u$  である.  $\lambda$  は  $f_A$  の固有値であるから  $\lambda \in \mathbb{R}$  である. よって  $u \in \mathbb{R}^n$  としてよい.  $u \in W^\perp$  となるがこれは  $W$  の定義に矛盾. よって  $W^\perp = \{0\}$ .

$f_A$  の固有値  $\lambda$  と固有ベクトル  $x$  について  $\text{Span}\{x\} = \text{Span}\{x\}^{\perp\perp}$  であり, 任意の  $y \in \text{Span}\{x\}^\perp$  について  $(y, {}^t Ax) = (Ay, x) = 0$  より  ${}^t Ax \in \text{Span}\{x\}$  である. よって  ${}^t Ax = \mu x$  とできる.  $\lambda(x, x) = (Ax, x) = (x, {}^t Ax) = (x, \mu x) = \mu(x, x)$  である.  $(x, x) > 0$  より  $\lambda = \mu$  である.

$\mathbb{R}^n$  の任意の元  $x$  は固有ベクトル  $v_1, \dots, v_n$  の線形結合で表せる.  $x = \sum_{i=1}^n a_i v_i$  とする.  $Ax = \sum_{i=1}^n a_i A v_i = \sum_{i=1}^n a_i \lambda_i v_i = {}^t A x$  である. よって  $A = {}^t A$  である.

[3] (1) 任意の  $x, y \in [0, 1]^\infty$  に対して  $|x_k - y_k| \leq 1$  である. よって  $\sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k} |x_k - y_k| \leq \sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k} = 1$  である. よって  $d$  は  $[0, 1]^\infty \times [0, 1]^\infty$  から  $\mathbb{R}$  への写像である.

$x = y$  なら  $d(x, y) = 0$  である. また  $d(x, y) = 0$  なら  $\sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k}|x_k - y_k| = 0$  であるから  $x_k = y_k$  である. よって  $d(x, y) = 0$  なら  $x = y$  である.  $d(x, y) = d(y, x)$  は明らか.

$x, y, z$  について  $\sum_{k=1}^n 2^{-k}|x_k - z_k| \leq \sum_{k=1}^n 2^{-k}|x_k - y_k| + \sum_{k=1}^n 2^{-k}|y_k - z_k|$  である.  $n \rightarrow \infty$  とすると  $\sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k}|x_k - z_k| \leq \sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k}|x_k - y_k| + \sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k}|y_k - z_k|$  である. よって  $d(x, z) \leq d(x, y) + d(y, z)$  である. よって  $d$  は距離.

(2)  $x_n \rightarrow a$  とする.  $d(x_n, a) = \sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k}|x_{n,k} - a_k| \geq 2^{-i}|x_{n,i} - a_i| \rightarrow 0$  ( $n \rightarrow \infty$ ) である. よって任意の  $k$  に対して  $x_{n,k} \rightarrow a_k$ .

任意の  $k$  に対して  $x_{n,k} \rightarrow a_k$  とする. 任意の  $\varepsilon$  に対して  $2^{1-n_0} \leq \varepsilon$  なる  $n_0$  が存在する. このとき  $\sum_{k=n_0}^{\infty} 2^{-k}|x_{n,k} - a_k| \leq 2^{1-n_0} \leq \varepsilon$  である. 1 から  $n_0 - 1$  までの整数  $k$  について, ある  $N_k$  が存在して  $n \geq N_k$  なら  $|x_{n,k} - a_k| \leq \varepsilon$  である.  $N = \max\{N_1, \dots, N_{n_0-1}\}$  とする. このとき  $\sum_{k=1}^{n_0-1} 2^{-k}|x_{n,k} - a_k| \leq \sum_{k=1}^{n_0-1} 2^{-k}\varepsilon \leq 2\varepsilon$  である. よって  $n \geq N$  なら  $d(x_n, a) \leq 3\varepsilon$  であるから  $x_n \rightarrow a$  である.

(3)  $\{x_{n,k}\}_{k=1}^{\infty}$  は有界閉区間  $[0, 1]$  内の点列であるから, 収束部分列を必ずもつ. したがって収束部分列  $\{x_{n,k_j^{(n)}}\}_{j=1}^{\infty}$  に対して数列  $\{x_{n+1,k_j^{(n+1)}}\}_{j=1}^{\infty}$  も収束部分列  $\{x_{n+1,k_j^{(n+1)}}\}_{j=1}^{\infty}$  を持つ. このとき  $\{k_j^{(n+1)}\}_{j=1}^{\infty}$  は  $\{k_j^{(n)}\}_{j=1}^{\infty}$  の部分列である. これが任意の  $n$  について成り立つから数列  $\{k_j^{(1)}\}_{j=1}^{\infty}, \{k_j^{(2)}\}_{j=1}^{\infty}, \dots$  を得て, それぞれ前の数列の部分列となっている. 数列  $\{s_n\}_{n=1}^{\infty}$  を  $s_n = k_n^{(n)}$  で定める.  $\{s_n\}_{n=1}^{\infty}$  は全ての  $m$  について  $n > m$  では  $\{k_j^{(m)}\}_{j=1}^{\infty}$  の部分列となっている. したがって  $\{x_{s_n,k}\}_{k=1}^{\infty}$  は収束列になっている. よって  $\{x_{s_n}\}_{n=1}^{\infty}$  は収束列である.

□ (4) (1)  $z = re^{i\theta}$  とする.

$$\begin{aligned} \int_{C_r} \frac{e^{iz}}{z} dz &= \int_0^\pi \frac{e^{ire^{i\theta}} ire^{i\theta}}{re^{i\theta}} d\theta = \int_0^\pi ie^{ire^{i\theta}} d\theta = \int_0^\pi ie^{ir \cos \theta} e^{-r \sin \theta} d\theta \\ \int_{C_r} \left| \frac{e^{iz}}{z} \right| dz &= \int_0^\pi |e^{-r \sin \theta}| d\theta \leq \int_0^\pi d\theta = \pi \end{aligned}$$

である. よってルベークの収束定理から

$$\lim_{r \rightarrow 0} \int_{C_r} \frac{e^{iz}}{z} dz = \int_0^\pi i d\theta = \pi i, \quad \lim_{r \rightarrow \infty} \left| \int_{C_r} \frac{e^{iz}}{z} dz \right| \leq \lim_{r \rightarrow \infty} \int_0^\pi |e^{-r \sin \theta}| d\theta = \int_0^\pi 0 d\theta = 0$$

(2)  $r > 0$  に対して  $z = 1/r$  から  $z = r$  までの積分経路を  $\Gamma_r^+$  とする.  $z = -r$  から  $z = -1/r$  までの積分経路を  $\Gamma_r^-$  とする.

$$\begin{aligned} \int_{\Gamma_r^+} \frac{e^{iz}}{z} dz &= \int_{1/r}^r \frac{e^{ix}}{x} dx = \int_{1/r}^r \frac{\cos x + i \sin x}{x} dx \\ \int_{\Gamma_r^-} \frac{e^{iz}}{z} dz &= \int_{-r}^{-1/r} \frac{e^{ix}}{x} dx = \int_r^{1/r} -\frac{\cos x - i \sin x}{-x} dx = \int_{1/r}^r \frac{-\cos x + i \sin x}{x} dx \end{aligned}$$

である. 積分経路  $\Gamma_r^+, C_r, \Gamma_r^-, -C_{1/r}$  によってできる閉曲線  $\Gamma$  を考えると, 被積分関数は原点を除いて正則であるから,  $\int_\Gamma \frac{e^{iz}}{z} dz = 0$  である. よって

$$\begin{aligned} 0 &= \int_{\Gamma_r^+} \frac{e^{iz}}{z} dz + \int_{C_r} \frac{e^{iz}}{z} dz + \int_{\Gamma_r^-} \frac{e^{iz}}{z} dz + \int_{-C_{1/r}} \frac{e^{iz}}{z} dz \\ &= \int_{1/r}^r \frac{\cos x + i \sin x}{x} dx + \int_{1/r}^r \frac{-\cos x + i \sin x}{x} dx + I(r) - I(1/r) \\ &= 2i \int_{1/r}^r \frac{\sin x}{x} dx + I(r) - I(1/r) \rightarrow 2i \int_0^\infty \frac{\sin x}{x} dx - \pi i \quad (r \rightarrow \infty) \end{aligned}$$

したがって  $\int_0^\infty \frac{\sin x}{x} dx = \pi/2$  である.